



真田サミットであいさつをする片倉さんと白石さん

ところがメッカで、亡くなったところがメジナ、そしてエルサレムで昇天した。その第三の聖地のあるパレスチナで、イスラエルが聖地エルサレムは絶対に我々の統一首都であると言ってアラブには返さない。一九六七年の第三次中東戦争以来居座り続けている。

それから、占領したところも一九九三年からオスロ合意というのがありまして、歴代のアメリカ大統領も一生懸命段階を追って、アラブに、パレスチナに土地を返すということをやってきたんですが、最近の極右勢力といいますが、イスラエルの政権はなかなかスケジュール通りに動かない。「土地と平和の交換」という、この大原則が打ち立てられているんですが、その通りにしない。

第三の聖地エルサレムを大切にしている世界の十三億といわれるイスラム人口はみんなそれを見ている。イスラエルが言うことを聞かないならということ、パレスチナ人は初めは石投げ闘争（インティファダ）をやっていたんですが、最近に至ってはついに自爆テロというような手段を使い、それに対する大量報復と、悪循環がエルサレムを中心にパレスチナの地で起こるようになってしまいました。冷

戦時代が終わった今、民族紛争の最たるものがこのパレスチナ問題なわけです。

超大国アメリカがもたらす矛盾

片倉：これはアメリカにも問題があるんですね。アメリカ歴代の大統領は口では中東和平と言っているんですが、いざ大統領選挙になりますと、全米の選挙区に六百万からのユダヤ系の市民がいる。しかも非常に高い知識層で、金融界にもメディアにも力がある。そういうユダヤ系の市民を考慮せざるを得ないというところから、パレスチナ問題についてなかなか公正な立場が取りにくいということ。このツケが今に回ってきたということが言えると思います。

ソ連邦解体後、アメリカは唯一の超大国、いわば自分がやりたいことは何でもできる。市場経済のグローバル化といいますが、どこにでも浸透してきておりますが、そのためにいるいるな形で矛盾も出てきています。貧富の差が出る、あるいは環境の劣化が起こる。特にイスラム教徒の場合、その被害者になる人たちが多いものだから、アメリカが悪いことにするわけですね。アメリカ一人勝ちの時代になって、どうもよくならない

じゃないかと。

今起こっているアフガン問題は、元をたただせば一九七九年のソ連邦によるアフガン侵攻につながるんです。このとき、アメリカがこれを押し返そうと動員したのがイスラム義勇兵なんですね。ビンラディンも義勇兵としてはせまじた。アメリカが最新兵器や爆破物の操作、そういうものを一生懸命にアラブ系の義勇兵に教えた。言ってみればアメリカが作った「フランケンシュタイン」が今度はアメリカに歯向かっているというのが現在の姿でございます。

アメリカのリーダーシップに期待

片倉：このような矛盾に対する不満分子の反発、それから「非日常のイスラム」、つまり反体制意識あるいは被圧意識といえるものが、自爆テロにまで持っていく一つの大きなマイナスのばねになる。それがあちらこちらで出てきている。これは一つの病理現象ですね。

ですから、その病巣をアフガンで外科的な手術によって摘出して、やはりその大もとのパレスチナ問題とか、大もとの貧富の差とか、そういうものを次々に取り除いていかないと行けない。これは時間がかかりま

PLOアラファト議長と会談する片倉（駐アラブ首長国連邦大使）さん（1986年、アブダビにて）



すよ。

今回のアメリカの六千人やられたんだから六千人ぐらい殺してもいいだろうというような単純発想、これはアメリカのまだまだ若いところでございます。この病理現象に対しては、じっくりと構えるというふうな一つの度量というが、柔軟性を私は唯一の超大国アメリカのリーダーシップに期待したいと思っております。

戦いと外交のバランスを常に考えて

川井：結局エルサレムというのは、イスラムの聖地でもある、キリスト教の聖地でもある、ユダヤ教の聖地でもある。片倉：三大宗教が重層構造をな

しているところなんですね。ですから、本当を言えば、みんなその聖地を共有するという気持ちがないとだめでしょうね。やはり「国際化」していかないと、そういう時代だと思つてございませぬ。

歴史の話に戻りますが、大坂夏の陣のとき、豊臣対徳川の決戦ですから、敵意と憎しみの渦が巻いていたと思つてますよ。そういうときに西軍の真田と東軍の片倉の間に心の交流があった。うっかりすれば通敵行為です。だけど、真田のお子さん方が片倉に引き取られるということがあったわけです。

やはり戦いというのは、大手で攻めるけれど、裏のからめ手は常に開けておく必要がある。

敵をコーナーに追い詰めて討ち取ればいいというものではないと思つてますね。

国際関係においても、巴のように戦いの部分が大きくなりまして話し合いも最小限になる。しかし、外交の部分を大きくすれば戦いの部分はだんだん縮まっていく。そのバランスを常に考えていかないと。戦い戦いで討ち取ればいいというものではないと思っております。

お互いの歴史を学ぶことが平和への道

川井：どうも我々が歴史を教わるのも一方的なんでしょうね。私は高校までは、いわゆる中央政権の方から見た東北史を教わりました。ところが、大学に入って初めて東北から見た日本史というものを教わって、まさに眼からうるこが落ちる思いがいたしました。

同じことで、例えば少なくとも十六世紀くらいまでは、イスラム文明の方がヨーロッパ文明よりはるかに上だったはずなんです。でもそういうことは教えない。じゃあ世界史で何を教わったかという、マホメッドのコーランが剣かという征服の歴史、そのくらいしか教わらないわけです。ですから、それが頭に染みこんでしまっていて、どうも色

眼鏡がかかったような見方になってしまふ。

片倉：そうですね。やはりお互いの歴史を学ぶということが、平和を求めるといふことにつながってくるという感じがいたします。

「アラブが見た十字軍」という研究がありますが、リチャード獅子心王などに率いられた十字軍というのは、殺りく、強姦、それはひどいことをやっていて、聖地エルサレムに着いた者はその一部だったといわれている。しかし、一転アラブの視点にたつと、サラディン率いる抵抗するアラブの方が秩序も、それから女性や子供、俘虜に対する待遇も人道的、公正なものがあつたといわれています。

さまざまな交流を行政に生かして

片倉：私が考えますに、いろいろな交流の中で向こう側の人の見る目、それからこちらがこう見るといふので、お互いに交流して、それで初めてちゃんとした情報が固まるんですね。

川井：私も、どうして国際姉妹都市をつくるのかという、結局は平和なんです。相手のことをお互い正確に知っていれば、戦なんぞする気にならないでしょう。それが一方的な知識

だけで思い込んでしまふ。そういうところに戦争が起こる大きな原因があるのだからと思っております。

片倉：今回、川井市長がイニシアチブをとられて真田サミットを開きました。参加した町村同士でいろいろな交流が起こってくる。昔の交流も改めて見直すし、また現在行われている情報の交流も、組織からいろいろな知恵を絞り合う。そういう発想は本当に素晴らしいと思つます。

川井：先生からお話いただいたことに、これからも十分配慮してまちづくりを行っていききたいと思つます。本日は長時間にわたって、貴重なご意見をいただきました。ありがとうございました。